

タイトル	2026 年度 学校推薦型選抜 共同教育学部（教育人間科学系 教育心理専攻） 小論文
評価の ポイント	国立青少年教育振興機構 高校生の科学への意識と学習に関する調査報告書—日本・米国・中国・韓国の比較—令和 7 年 (https://www.niye.go.jp/wp-content/uploads/2025/07/kagaku_zentai.pdf) の中から、科学への意識と学習に関する日本の高校生の特徴を読み取り、そうした結果が得られた理由を論ずる問題である（800 字）。 評価に当たっては、次のような点を特に重視した。 (1) 米国・中国・韓国との比較などを通して、日本の高校生の特徴が図から適切に読み取れているか。 (2) そうした結果が得られた理由について、自分の考えが論理的に適切に述べられているか。
解答例	日本の高校生の回答を見ると、理科の学習について「面白い」「受験に関係なくても重要だ」「実験を行うことが大切だ」という点で、いずれも 66%以上の高校生がこうした意識をもっている。この結果は 4 カ国の中で必ずしも第一位というわけではないが、高い水準と言える。ここから日本の高校生は理科の学習の重要さや面白さ、そこで実際に実験を行うことの大切さを意識していると言える。また大学進学との関連でも、理科が重要だと考える高校生は多い。このように日本の高校生は、学校の授業で理科を学ぶことに対しては肯定的な意識を持っている。 しかし「望む仕事につくために理科の勉強が重要である」は 52%であり、低い傾向がある。さらに「社会に出たら理科は必要ない」という回答は 4 カ国の中で最も多い。また「学校で学習するよりもっと多く科学について勉強したい」という回答は 4 カ国の中で最も少ない。ここから、学校での授業を離れて理科を学ぶことに対する意欲や関心は低いと考えられる。 日本の学校での理科学習では、小学校以来、身の回りのものごとから理科の学習内容につなげるなど、児童生徒の興味・関心を喚起させる工夫がされている。また実験を行って予想や仮説を確かめたり、実験結果が得られた理由を考えたりするなど、児童生徒自身が自分で考え、他の人と話し合う機会も多い。こうしたことが、学校での理科学習に対する肯定的な意識につながっているのだろう。 その一方で、理科の学習が、より広い世界とどう結びついているのかを考える機会が、少ないのではないだろうか。例えば気候変動、感染症、心身の健康などを理解するのに理科や科学の知識は不可欠だが、そうした問題と結び付けた理科学習が少ないのではないだろうか。その結果、授業は面白いし、大学合格には重要だけれども、その先の自分にとって「自分事」とは思えなくなっているのではないかと推測できる。

タイトル	2026 年度 学校推薦型選抜 共同教育学部（教育人間科学系 教育心理専攻） 面接
評価の ポイント	・ 志望動機，教育や心理学に対する興味関心についての質問に対し，的確に自身の意見が述べられているか。 ・ 自身の回答に対する面接者からの追加質問に的確に応答できているか。